

生きてはたらく言葉の力を育てる国語科学習指導の在り方

－ P I S A型読解力の育成を通して－

国語科 戸部 義則 高橋 重年 荒川卓士

1 研究テーマ設定の趣旨

国際化、情報化を迎えた現代社会においては、この社会変化に対応できる柔軟性と適応性等が期待される。この期待に応えるためには、国際社会に必要なコンピテンシー（能力）が求められている。OECDにおける「キー・コンピテンシー」の概念として、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」とある。具体的には、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）、③自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）の三つの内容から成る。

また、「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」によると、「現行学習指導要領は、『生きる力』をはぐくむという理念に立脚しており、『知識基盤社会』の時代において『生きる力』という理念がますます重要になっている。『生きる力』は、OECDの『主要能力（キー・コンピテンシー）』という考え方を先取りしたものと言える。」と述べており、この両者は同じ方向を目指しているといえる。今回改訂される新学習指導要領も、これまでと変わらず、「生きる力」の育成を目指しており、基本的な考え方は変わっていない。

この新学習指導要領において、国語科に求められているのは「言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」（「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」、下線は本校国語科による）である。この意味でも、効果的に社会に参加するために様々な状況において、話したり書いたりする言語のスキルの育成を目指したPISA型読解力の育成は急務であるといえる。

本校国語科は、これまでも20年近くにわたり社会生活を豊かにするような言語能力の育成を目指し、指導してきたが、近年、いわゆる「PISA型読解力」として脚光を浴びてきた部分でもあり、新学習指導要領における国語科の目標を見据え、あらためて研究テーマを「生きてはたらく言葉の力を育てる国語科学習指導の在り方、－PISA型読解力の育成を通して－」とし、基礎的・基本的な知識・技能を活用して探究することのできる国語の能力を身に付けることに資する授業の開発を行っていくこととした。

2 研究計画

1 第1年次（平成20年度公開研発表）

- (1) 研究計画の作成
- (2) PISA型読解力に関する理論研究
- (3) PISA型読解力を育成する授業の試行と改善

2 第2年次（平成21年度公開研発表）

- (1) PISA型読解力を育成する授業の試行と改善
- (2) 授業実践の検証及び指導計画の改善

3 第3年次（平成22年度公開研発表）

- (1) 授業実践の検証
- (2) 移行措置期間中の年間指導計画の作成
- (3) 研究のまとめ

3 前年度までの研究

1 第1年次の研究（平成20年度公開研発表）

本研究を行うにあたり、本校国語科では、まずPISA型読解力に関する理論研究を行い、授業開発のための追求の仕方や考え方を示した。（詳細は20年度研究紀要参照）

(1) 「活用する力」の育成とPISA型読解力

PISA型「読解力」は、テキストの中の事実を切り取り、言語化・図式化する「情報の取り出し」だけではなく、書かれた情報から推論・比較して意味を理解する「テキストの解釈」、書かれた情報を自らの知識や経験に関連づけて理解・評価（批判・仮定）する「熟考・評価」（下線は本校国語科による）の三つの観点を設定している。

このように、PISA型読解力では、テキスト内部の情報を利用するだけでなく、それまでに培った既習の知識・技能等を用いて考えさせるなど、テキスト外の知識・技能の活用の側面も持っており、本校国語科ではPISA型読解力の育成をしていくことが、新学習指導要領における「活用する力」の育成につながると考えた。

(2) PISA型「読解力」育成のための追究の仕方、考え方

本校国語科では、これまでも様々な研究の中で、活用ということを意図した授業を行ってきた。しかし、いくら言語技術を習得しても、それを意欲的に、積極的に使おうとする態度やいつ、どのように使うのかなど、つまり思考する力、判断する力など、いわゆる活用する力を身に付けさせなければ、他の学習活動や実生活に役立ってはいかないということがわかってきた。

また、これまで本校国語科では、いわゆる「非連続型テキスト」の指導についてはほとんど行っていなかった。このことも課題の一つである。

以上のようなPISA型「読解力」育成のための追究の仕方、考え方を受け、習得した知識・技能の活用の力を高めていく指導の在り方を考えるにあたり、これまでの解釈・論述よりも、より質の高い解釈・論述をしていくためには「熟考・評価」（書かれた情報を自らの知識や経験に関連づけて理解・評価（批判・仮定）する）の力を育成することが必要と考え、授業改善の視点を次の二点として行っていくこととした。

ア 非連続型テキスト教材の開発

イ 批判的思考力の育成を意識した指導過程の工夫

2 第2年次の研究（平成21年度公開研究発表）

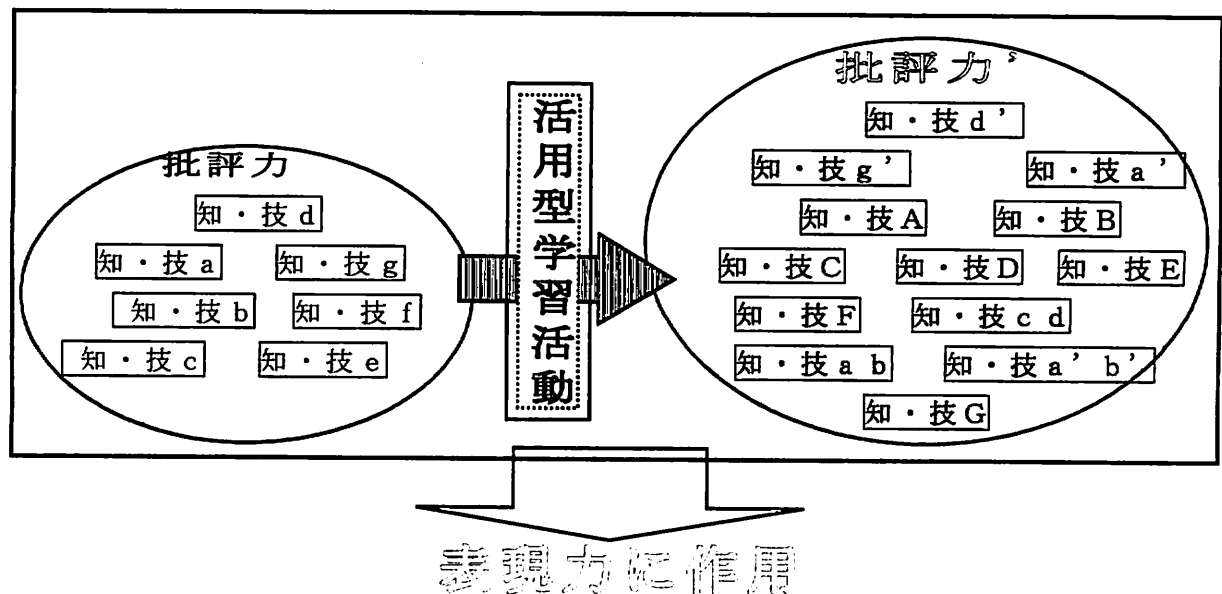
第2年次には、第1年次の授業改善の二つの視点を受け、授業実践し、それを検証し、

次のような考えを示した。（詳細は21年度研究紀要参照）

（1） 本校国語科における活用の考え方

「熟考・評価」では、外部の知識（これまでに獲得してきた知識・経験、他の情報源からの知識等）を用いて、テキストの内容や表現を吟味・検討したり、その妥当性や客観性、信頼性などを評価したり、自分の知識や経験と結び付けて建設的に批判（クリティカルシンキング）することを重視する。

本校では、この「批評力」を、活用型学習活動を行うことによって、育成しようと考えている。小学校で習得した能力の定着を図りながら、中学校段階にふさわしい文章や資料等を取り上げ、課題を設定し、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、他者と相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していくことで、その定着を図ろうと考えたのである。その習得内容のイメージを図にすると、次のようになる。



（自己の表現に批評を加える「自己内対話」等）

すなわち、これまでに獲得してきた批評力に資する知識・経験、他の情報源からの知識を、活用（活用型学習活動）して、定着・深化を図り、次の学習活動では、前に身に付けた新しい知識・技能を活用して、といった具合に次々とふくらませていくというイメージである。

そして、批評力を「力」としてとらえずに、「量」に還元して考える。つまり、批評力がない生徒とは、「考える力」（分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力）がない生徒というのではなく、批評するための材料・視点の数（考え方の「量」）が足りないととらえ、この量を増やすことが批評力を育てることにつながるものと考えたのである。

（2） 授業改善の手だて

ア 複数教材の比較・検討

活用型学習活動への手だてとしては、指導過程の中に、複数の教材を比較・検討する部分を含めることを試行している。文章の特徴（内容や表現）をとらえたり、その妥当性や客観性、信頼性を評価したりするためには、一つの教材を吟味するだけでは難しいと考えたからである。この学習方法を年間指導計画の中に意図的に配置することで、批評につながる様々な視点を生徒に与えることができるのではないかと考えた。

イ ガイダンスの設定

(2) 第2学年

月	指導事項	A	B	C	伝統	学習活動	教材名	学習の内容	評価規準	評価方法
9	Cイ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。 Cエ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や経験と関連付けて文章自分の考えをもつこと。			イエ	ア (ア) (イ)	古人のものの見方や考え方をとらえる。	徒然草 (3)	1 現代語訳と対照させながら古文を音読し、「学習の課題a」に取り組む。 2 「学習の課題b」に取り組む、読みを深める。 3 P74の解説文を読み、「徒然草」の成り立ちや兼好法師について知る。 4 「学習のポイント」を読んで、古文の特徴的表現(係り結び・反語)について知る。 5 「丹波に出雲といふところあり」と「仁和寺にある法師」を読んで、法師の人物像を比較する。	・説明や描写の仕方や、文体など文章の特徴に注意して読んでいる。 ・文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くしている。 ・描かれ方の違いからそれぞれの人物の特徴をつかんでいる。	教師に観察作業用紙への記入状況
	Cイ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。 Cエ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や経験と関連付けて文章自分の考えをもつこと。			イエ	ア (ア) (イ)	古人のものの見方や考え方をとらえる。	平家物語 (4)	1 「那須与一」の、場面の状況の要約部分と現代語訳を読み、出来事のあらましをとらえる。 2 「那須与一」の古文の部分を繰り返し音読し、「学習の課題a」に取り組む。 3 古文と現代語訳を対照して、「学習の課題b」に取り組む、場面の状況や与一の心情について考えたことを話し合う。 4 後に続く「弓流し」の場面を読み、人物像を比較させる。	・説明や描写の仕方や、文体など文章の特徴に注意して読んでいる。 ・文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くしている。 ・戦の場面を明暗両面からとらえている。	教師の観察作業用紙への記入状況

(3) 第3学年

月	指導事項	A	B	C	伝統	学習活動	教材名	学習の内容	評価規準	評価方法
4	・一年間の国語学習の見通しを持たせる。					国語学習の意義を考え、各自がこの1年間の目標を持つ。	ガイダンス (1)	1 国語科の学習の内容や方法について教師の説明を聞く。	・一年間の国語学習の見通しに興味を持って、取り組んでいる。	行動の観察
	Cア 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。 Cウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。			アウ	イ (イ)	「叫びの表現」と「描写の表現」について考えさせることにより、自分の文章を反省させ、記述をする際には、工夫をする意識を持つ。	叫びから描写へ (1)	1 描写について、教師の説明を聞く。 (1) 描写を用いた文と評価語を多用した文とを読み比べ、違いについて考える。 2 練習問題として、描写を用いた短文を複数書く。	描写を用いた文と評価語を多用した文との違いを明らかにしている。 ・自分が伝えようとするものが、効果的に伝わるよう記述を工夫して書いている。 ・語感を磨き、語彙を豊かにしようとしている。	学習プリント 学習プリント
	Bア 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。 Bウ 書いた文章を読み返し、文章全体を整えること。 Cウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。			アウ	ウオ	前時の「描写の授業」で学んだ、描写表現の仕方を想起し、テーマに基づき、相手意識(翌年修学旅行に行く下級生に対して奈良・京都の見所を持って紀行文を書く。	君もレポーターになろう (4)	1 複数の旅行情報誌を読み比べ、文章の特徴を知る。 2 修学旅行のルポルターージュを書くため、テーマを決め、文章構成を考える。 3 読み手(下級生)を意識しながら、描写を工夫してルポルターージュを書く。 4 自分で書いたルポルターージュを推敲する。	・複数の旅行情報誌の文章を読み比べ、構成や展開、表現の仕方について、それぞれの特徴をとらえている。 ・文章の形態に応じた適切な構成を工夫し、自分の立場および伝えたい事実や事柄を明確にしてわかりやすい文章を書いている。	観察ワークシートの記述 生徒の作品観察

2 授業実践の検証

本年度も授業実践の検証を行ったが、本年度は本研究の第3次であり、その検証方法は以下の研究の評価で説明する。

5 研究の評価

本校国語科では、「批評力」を短期間で効率よく向上させるには、それを「力」としてではなく、「量」に還元してとらえる立場をとってきた。「量」とは、この場合、批評するための理屈の組み立て方の情報量を意味する。つまり、「批評力」がない生徒とは、「考える力」（分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力）がない生徒というのではなく、批評するための材料・視点の数（考え方の「量」）が足りないととらえ、この量を増やすことが「批評力」を育てることにつながるものと考えたのである。そのため、材料・視点の数を量的にとらえ、評価することとした。以下に例を示し、評価の仕方を説明する。

1 平成21年度校内授業研究会における評価例

(1) 指導略案

時間	学 習 活 動	評 価 規 準	評価の主体・方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 提示された資料を、これまでの経験をもとに吟味するとともに、宣伝・広告の目的及び、その特徴について考える。 昨年度と一昨年度の「ふぞく・ふれあい・ふえすたボランティア募集チラシ」を、その目的、作成者の意図、またこれまでに目にしてきた広告との比較によっても、批評する。 	<ul style="list-style-type: none"> 宣伝・広告という目的に応じた表現の工夫の仕方を考えている。 「勧誘」という目的のためにふさわしい表現がなされているかを、形式・内容の両面に注意して考えている。 	観察(発言・態度) 作業用紙への記入 状況 観察
1	<ul style="list-style-type: none"> 批評をもとに、グループごとにチラシを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「宣伝・広告」という形態に応じた構成・叙述の仕方を工夫してイベントボランティア募集チラシを書いている。 	観察(作成過程) <u>作品分析①</u>
1	<ul style="list-style-type: none"> 学級発表会を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 他のグループのチラシを構成・表現の仕方・文章の特徴等から評価(批評)する文章を書いている。 	観察(態度・様子) <u>作品分析②</u>

(2) 本題材で行う指導の手だて

ア 多様な教材・複数教材の提示

- ・ 既習事項の掘り起こしができること（内容面では、情報の正確さ等、形式面では、簡条書き、レイアウトの手法等）
- ・ 本授業で学んだことが、実生活にいきることを実感させる教材

イ 教材の比較・検討（資料1，資料2）

- ・ テキストの特徴を際立たせる（一方は、簡条書きを用いていない等）
- ・ 内容（誘い文句）の重要性について認識させる。（体裁が整っていても、訴えるものがないと心が動かない。）

ウ 自己のチラシ（表現）への活用

エ 批評文を書かせること（本授業で確認した知識・技能を活用し、批評するための視点とする。）

(3) 評価の方法

本題材では、第1時に行った複数教材（下記資料2，資料3）による作品分析により、下記チェックシート（資料1）の内容が、よいチラシの条件として生徒から挙げられた。

資料1 チェックシート

内容

- ☐ ボランティアしたくなるような誘い文句をいれた
- ☐ 誤解を招く表現を避けた

紙面の工夫

- ☐ 紙面の構成（情報の置き場所）を工夫した
- ☐ 簡条書きで整理した
- ☐ 強調を施した（囲み、Font，下線）

資料1，2を比べ、既習の知識・技能を想起させるとともに、新たな視点を発見させ、それをまとめたもの。

この内容が、本題材で活用されるべき知識・技能である。この技能を活用してボランティア募集チラシを作成した例が、生徒作品例（資料4）に現れている。さらに、鑑賞文例（資料5）では、チェックシートの内容を批評の視点として活用している。そのため、本

資料2

**ふぞく・ふれあい・ふえすた
ボランティア募集！**

10/18(土)に、ふぞく・ふれあい・ふえすたが今年も開催されます。ついては、当日ボランティアとして働いてくれる学友の皆さんを募集したいと思います。

○仕事の内容は、以下の通りです。

- ・各イベントブースにおける先生方の補助（焼き羊・餅つきなど）
- ・お年寄りの荷物運び
- ・休憩所での来賓者の接待 など……

毎年、たくさんの学友の皆さんが協力をしてきています

今年度手伝ってくれるという人は、24日(水)までに、担任の先生に申し出てください。

資料3

**ふぞく・ふれあい・ふえすた
ボランティア募集！**

・10/20(土)に、ふぞく・ふれあい・ふえすたが今年も開催されます。ついては、当日ボランティアとして働いてくれる学友の皆さんを募集したいと思います。なお、当日の昼食は、学校で用意をします。主な仕事の内容は、各イベントブースにおける先生方の補助（バザー・焼き羊・餅つきなど）やお年寄りの荷物運び、休憩所での来賓者の接待です。

昨年、60人を超える学友の皆さんが協力をしてくれました。今年度手伝ってくれるという人は、27日(木)までに、担任の先生に申し出てください。

生徒は、自らの作品を書く場合においても、本題材で習得した技能を用いて表現活動を行うことが予想される。

このように、国語科では、習得した知識・技能を活用することで作品作りや批評を行っている。特に批評力を養うことは、自己の表現力を向上させるために有効であると考えられる。

生徒は自らの表現に対して自ら批評を行う（自己内対話）ことで、作品の質が向上すると考えるからである。

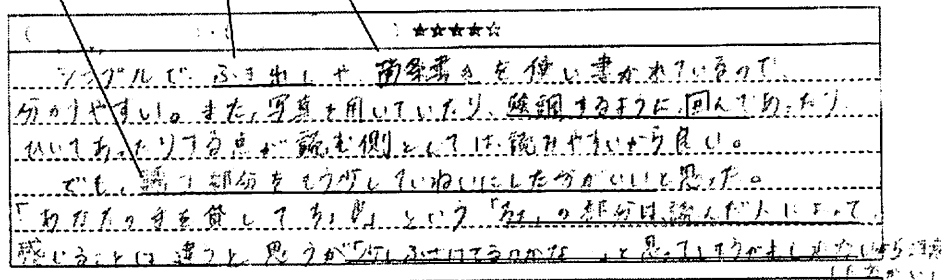


←生徒作品例（資料4）

ボランティア募集チラシ

（作品分析①）

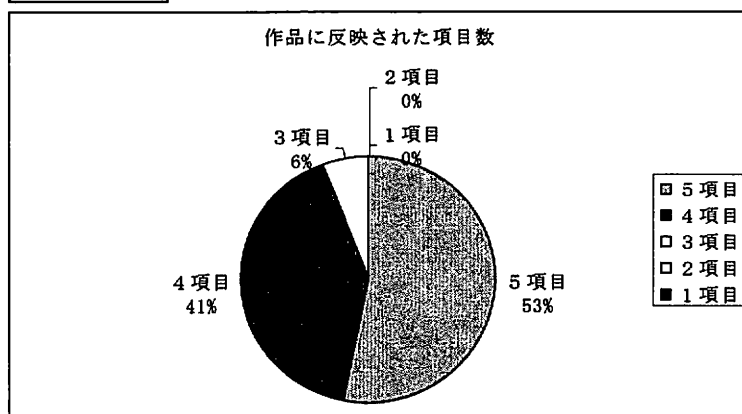
鑑賞文例（資料5）（作品分析②）↓



上記の評価をクラスごとに行った。

ア ボランティア募集チラシから

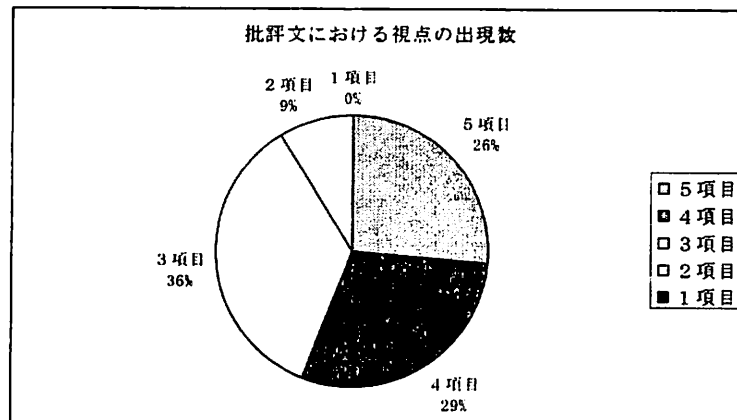
資料1のチェック項目が反映されているか。（5項目のうち、いくつ使われているか。）を評価した。作品分析①



前ページの結果のように、94%の作品が、4項目以上の工夫を施しており、「よいチラシの条件」の視点を獲得したと言える。

イ 批評文例から

資料1のチェック項目が反映されているか。(5項目のうち、いくつ使われているか。)を評価した。作品分析②



上記結果から、55%の生徒が、4項目以上の視点を用いて批評をしており、3項目の生徒と合わせると91%の生徒が、多方面から、作品を批評していることが分かった。ただし、5項目すべてを用いている生徒の中には、ただふれているだけの者もいたり、3項目しか用いない生徒の中にも、一つ一つの項目に関し、丁寧な考察がされている者もあり、項目数だけで判断できるものではなく、質も重要である。それらを勘案しても、授業者のねらいをおおむね達成していたと考える。

6 成果と課題

本校国語科として3年間「活用型学習活動」について、その考え方、指導過程、手立て等を考えてきた。「活用型学習活動」は教科横断的に思考力・判断力・表現力を育成するためのものである。この思考力・判断力・表現力に関しては、文化審議会答申（「これからの時代に求められる国語力について」平成16年2月）において、考える力、感じる力、想像する力、表す力の育成として提起されている力と関連していると考えられる。国語力の育成を直接担うのは国語科の役割であるが、国語力の基礎を確実に身に付けさせて、他教科でも応用できるようにすることが大切である。それには国語科の枠を超えて国語力の育成を考えることが必要であり、例えば、社会科や理科でレポートを書いたり、調べたことを発表したりするといった「活用型学習活動」をよりいっそう充実させることが重要である。3年間研究してみて、そう再認識したことが成果の一つといえるだろう。

また、授業を実践し、検証することで、複数教材の共通点や相違点を発見したり、既習の教材との比較をする活動等、共通の要素を持つ学習活動を複数回経験させることや、前後の学習に共通する一般原理を学習させることにより「転移・転用」を促すという観点から、単元の最初に、経験を一般化させる「ガイダンス」の部分設けるなど、指導過程の工夫を凝らすことで、ある程度の効果を得られるということもわかった。

課題としては、非連続型テキスト教材のさらなる開発であろう。本年度は「宣伝・広告」を取り上げたが、「地図」、「情報シート（カタログ、時刻表等）」など、まだまだ開発の

余地がある。魅力的な教材を開発したい。

評価についても課題がある。評価のところでも述べたように、本校国語科では「批評力」を「力」としてではなく、「量」に還元してとらえる立場をとってきたが、量だけではやはり図りきれない「質」という部分があることも事実である。この「量」と「質」をいかにうまく評価に取り入れ、検証していくかが今後の課題である。

【主な参考文献・引用文献】

- ・ドミニク・S・ライチェン，ローラ・H・サルカニク：「キー・コンピテンシー国際標準の学力をめざして」
2007年，明石書店
- ・文部科学省：「読解力向上に関する指導資料-PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向-」
2005年
- ・有元秀文：「リーディング・リテラシーを育てるためのカリキュラム，学習指導・評価
方法の開発」 <http://www.nier.go.jp/arimoto/index.html>
- ・有元秀文：『どうしたら自分の意見が言える子どもを育てられるか？』，
国語教育 2008年1月号，明治図書
- ・国立教育政策研究所：「PISA2006年調査『評価の枠組み』OECD生徒の学習到達度調査」，
2007年，ぎょうせい
- ・道田泰治，宮元博章：「クリティカル進化論」，1999年，北大路書房
- ・文部科学省：「中学校学習指導要領」2008年3月
- ・香西秀信：『論理的思考力と国語学力』，中学校国語情報誌「かけはし」
2003年4・5月号，東京書籍
- ・宮元博章：『PISA型読解力に関連する考え方』，指導と評価，2009年3月号，図書文化